



Title	森の精霊が教えてくれたこと : GLOCOLでの経験のその後
Author(s)	切川, 菜央
Citation	GLOCOLブックレット. 2016, 18, p. 144-148
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55589
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

5-3

森の精霊が教えてくれたこと GLOCOLでの経験のその後

切川菜央 大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻博士前期課程修了

1. 自己紹介

私は幼少期から環境問題に興味があり、大学では環境技術を学び、将来的には技術で環境問題を解決できる人になりたいと考えていました。現在は、(株)神鋼環境ソリューションで民間企業向けの水処理設備や薬液リサイクル設備の計画設計を担っています。

大学は私立大学に通っていましたが、大学院進学を考えた際に、より最新の技術を学びたい、院生がより多い環境で切磋琢磨しながら研究がしたいと考え、他大学に進学しようと考えました。さまざまな大学を見た結果、やりたい研究に合致した研究室があったことはもちろんですが、学部関係なく大学として“国際性”を重視している大阪大学に興味を持ちました。この理由としては、大学まで環境問題を学ぶ中で、“Think Globally, Act Locally”が重要であると理解しながらも、国際的な問題を授業で学ぶことはあっても、当事者意識を持って考える機会がなく、そういった機会を得たいと考えていたためです。また、副専攻制度があり、他学部のプログラムに参加できたり、授業を受講するだけでなく、共同して作り上げていく体験型のプログラムがあるところにも魅力を感じ、受験を決意しました。

GLOCOLに出会ったのは、入学後の副専攻説明会でした。自分の掲げた疑問を調査するために、様々な国に行くことができると聞いて、単純に面白そうと思いました。説明係を担当されていた小峯先生から「タイの山中でホームステイできるよ。川でお風呂が入れるよ。」等、冒険心くすぐられる説明を受け、ただなんとなく面白そうだからという不純な動機でプログラムに応募することにしました。

2. GLOCOLでの活動

私はGLOCOLの海外FSプログラムで、タイ・ハッキヤ村(2011年)と、中国・雲南省(2012年)に参加しました。

タイ・ハッキヤ村(カレン族)の調査では、4泊5日のホームステイ、村人への聞き取り調査を実施しました。自身のテーマとして、「環境の変化による伝統的生活の変容」を掲げ、カレン族の伝統的な生活を維持している中で、地球環境問題を体感していることはあるのか、またそれに伴い自然環境に密接に関係する精霊信仰について変化はないかを調査しました。2013年には未来戦略機構の補助金を得て、前回調査した環境問題から一歩踏み込んだ「精霊信仰とエネルギー事象」について、建設中の水力発電に注目し、



再度聞き取り調査を実施しました。

中国・雲南省の調査では、タイの原始的な生活の変容から一歩進んだ、すでに国立自然保護区として、自然環境と文化を保全する環境が整っている場所で、同様の調査を実施したいと考え参加しました。この調査では、少数民族の村人、雲南省環境自然保護区の方々へ聞き取り調査を実施しました。ここでは、ゴムプランテーションが急速に拡大している背景があったため、「バイオマスの利活用」に重点を置いて調査を実施しました。

3. GLOCOLでの活動から得たもの

GLOCOLでの活動の中で、数えきれないほどたくさんのことを学び、気づきがありました。ここでは卒業後3年が経過した中でも特に生きているものを3つに絞り、以下に挙げたいと思います。

1つ目は、世界には多様な価値観があり、そこに壁はないということ、2つ目は、多様な価値観を融合させれば、自分一人ではたどり着くことのできなかつた解にたどり着けるということです。

GLOCOLのプログラムに参加するまでは、グループワークが苦手でした。なぜならば、自分の意見が批判・否定されたら、相手の意見にうまくコメントできなかつたらといった不安があったためです。しかし、GLOCOLのグループワークを通して、その考えは一変しました。事前学習の段階では、

自分の掲げたテーマについて他専攻の学生と議論し、現地ヒアリングでは、ヒアリングと定義しつつも、現地の方々の意見の搾取にならぬよう“意見交換”を数多く実施しました。また、その議論や意見交換は、単なる同調や批判で終わらずに、各々の意見を尊重し、かみ砕き、意見を融合させて新しい見解を生み出すということが多くなされました。

その中で、自分では思いつきもしなかった考えに多く出会いました。自分とは違う国・環境で育ち、違う国・環境で学んできた者同士であるからこそ、様々な意見が生まれるのであると感じました。国境を越えてもそれは同じであり、今まで勝手に作り上げていた“国境”という壁は気が付けば意識なくなっていました。また、グループワークでは答えのない問題の中で生まれた小さな疑問の一つも取りこぼさず、尊重し、議論を深めるといったことが繰り返して実施されました。この時初めて“違う意見”や“小さな疑問”が貴重なのだと体感しました。今まで、違う意見だからこそ、それが壁となり批判・否定されるのだと思い、グループワークには不安を感じ、身構えて参加していました。しかし、この経験から一人ひとりの意見が異なることは当たり前であり、“違う”からこそ新たな意見に出会い、また融合させることで思いもよらぬ解にたどり着くのだと気づきました。そして、何よりそのような意見を融合させる過程そのものは、とても楽しく、身構えて挑む必要は何もないのだと身を持って体験しました。

思い返せばそれまで経験してきたグループワークでは、意見を融合させることの重要性に気づけていなかったために、意見の同調や批判で終わらせてしまうものが多かったように思います。また、会社では業務中の会議の在り方について、次のような注意がよくなされます。

- ・多様な意見を尊重しましょう
- ・多角的な視点を持ちましょう
- ・活発で建設的な意見交換を心がけましょう

これは、誰しもうもが耳にしたことがあり、頭では理解できていることです。しかし会議の実情はというと、発言力のある人が発言し、発言しない人は全くせずに終了するということが時に生じます。このように、“違う”意見であることに身構えて意見を言えない、意見を融合させるという過程まで到達しないということが生じる原因の一つとして、“違う”意見を融合させることが楽しいという経験がないことがあげられるのではないかと考えます。私はこれについて経験できたおかげで、会議や打ち合わせの場面だけでなく、人との接する全ての機会において、人の意見を一旦受け入れ咀嚼し、自分の考えとどう融合させることができるか、建設的に考える意識づけができるようになりました。

3つ目は、「技術者としてエンドユーザーの意見を盛り込んだ技術展開をする」という、自身のライフテーマを見つけることができたことです。

GLOCOLと出会うまでは、高効率、高性能な環境技術こそが、環境と人々と救うことができると考えていました。しかし、海外FSで以下のような経験をし、考え方が変わりました。

■タイ ハッキヤ村

カレン族の伝統的な生活を送ながらも、近年では水力発電用ダムの

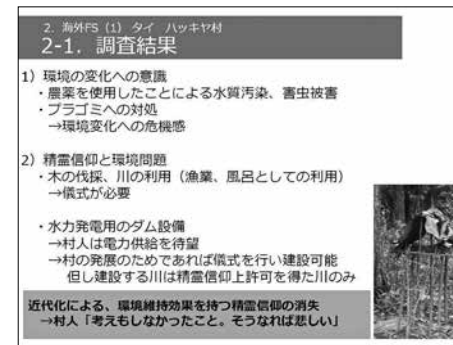
建設を実施しており、村人たちも電気のある生活を待ち望んでいました。その一方で、カレン族特有の精霊信仰が失われることを危惧している人はいませんでした。しかし、「近代化が進行し、時間の使われ方や、精霊を信じない人が増加し、いつの間にか精霊信仰が失われたらどう感じますか」という私たちの問いに対し、「考えもしなかった。そうになったら寂しい」という回答が得られました。

■中国 雲南

外部からの新しいモノの流入、内部での価値観の変化により、近代化が進行する中で、ヒアリングを行った少数民族の中には「都会的な暮らしには憧れない。あの慌ただしい生活が幸せとは思えない。」という回答が得られました。

上記のように、「望まれない開発」があるのだということを自分の耳で聞いたとき、たとえ最新の技術を導入し、環境問題が改善されたとしても、その地域の文化が失われ、生活様式が一変してしまうことがあれば、それはその地域への最善解ではないと気づきました。最善解を見出すために、技術者の意見だけでなく、エンドユーザーの人々や技術以外の視点を持った人々と共同し、時には技術導入にブレーキをかけることのできる技術者になりたいと考えるようになりました。

今はまだ、自身の技術が追いついておらず、この技術は本当に必要か、最新技術というだけで持て囃されていないか等、疑問に思うことで留まっています。しかし自身の技術を磨き、経験を積んだ暁には、自身の疑問



を最善策に代えて、環境もそれを取り囲む人々も幸せにできる技術提案ができるようになりたいと考えています。FSで技術を取り囲む人々と実際に触れ合う機会がなければ、エンドユーザーのことを思慮の範囲にすることはできていなかったかもしれません。FS調査を通し、このようなライフテーマが見つかったこと、ライフテーマに立ち返ることのできる場所・仲間がいるということは、社会に出てから自分を見失わない基盤、そして大きな原動力となっています。

4. 最後に

GLOCOLでの活動中、全てにおいて、私は今まで考えたこともなかった、モノの見方・考え方との出会いの連続でした。数値や理屈ではカバーしきれない答えのない問題と向き合う中で、悩み続ける期間も多くありました。しかし、その悩んだ期間で生まれた小さな疑問の一つ一つを、考える種として、真摯に向き合い、議論するということを実践にて教えて下さった先生方に感謝いたします。この学びがあったからこそ、さらに多様な意見に出会い、ライフテーマに出会うこともできました。本当にありがとうございました。

